

# 人の語りを聴くということ

## —— 体験を知ることへの試み ——

甲南大学学生相談室 西 浦 太 郎

### I. 問題と目的

カウンセリングにおいて、カウンセラーは話し手であるクライアントの話を聴くことになる。土居（1977）が「面接を事とする専門家の専門性は、彼の行う面接の質によって測られる」と述べているように、カウンセラーにとり、いかに人の話を聴き、相手がそこでどのような体験をするかは極めて重要なことであるといえる。

さて、われわれが相手の話を聴き、何かを受け止めたと感じるとき、さまざまな形で表現される。例えば、それは相槌であったり、言葉で言い表されたりすることもある。また、身振り手振りや、相手への眼差し、沈黙などの言葉以外の形で表現されることもあろう。このように、心理面接ではカウンセラーにより、様々な言語的・非言語的な形で、相手への共感や理解が表現されているといえる。

しかし、クライアントは、様々な文化の中を生き、それぞれの背景を抱えて、苦悩してカウンセラーの元を訪れる。これらの人々の悩みや困りごとは、人によって異なり、多くの場合、複数の要素が複雑に絡み合っているが、本来、これらの人々が生きてきた過程やその語りを聴き、他人である聴き手のカウンセラーが分かるということは、大変、困難なものである。

このとき、カウンセラーが、果たしてこれらの人々の言葉を本当に分かり、理解しているのかという疑問が浮かび上がる。そもそも、困難な体験をしているクライアントの話をカウンセラーが聴き、「分かる」ことなど可能なのであろうか。

本論では、臨床において、相手を理解する際に

用いられる言葉を取り上げながら人が人の語りを聴くことにおいて営まれていることについて様々な角度から考察する。

そこでまず、人の話を聴くにあたり、「分かる」という言葉の意味や用法を取り上げ、一般的な文脈において人の話を聴くことについて述べる。そして、土居（1977）が論じる「分かる」・「分からない」を取り上げて、臨床的な観点から「分かる」について考察をする。

その後、英語とドイツ語において「分かる」に近い概念を紹介し、他の文化におけるこれらの語用や概念から人の話を聴くことについて考える。そして、最後に、実際の人の語りを取り上げ、臨床的に人の話を聴く際に重要と思われる「知る」、「知らない」を援用して人の話を聴く行為や営みについて述べる。

### II. 「分かる」ということ

#### 1. 日常の「分かる」

日常において、相手の話を聴き、何かしら腑に落ちたときに「分かる」と言うことがある。「分かる」を広辞苑（1998）で見ると、次のように書かれている。

「わかる 分かる・別る・判る・解る」

- ①きっぱりと離れる。別々になる。
- ②事の筋道がはっきりする。了解される。合点がゆく。理解できる。
- ③明らかになる。判明する。
- ④世情に通じて頑固なことを言わない。

①の「きっぱりと離れる。別々になる」は、例えば、「ケーキを分ける」などと「物理的」に何かを分けるときや、グループを男女に分けるといったように属性に基づいて分類する際にも使われる。このようにもともと一つのまとまりであったものが分けられて別のものにすることを意味する。

②の「事の筋道がはっきりする。了解される。合点がゆく。理解できる」は、主に「理解」に関するものである。例えば、人の話を聴いている際、相手の話しや体験に何らかの点で共感できたとき、人は「分かる、分かる」というように、日常的によく用いられていると思われる。また、「勉強が分からない」というように知的な領域に言及するときにも用いられる。

③の「明らかになる。判明する」は、例えば試験の結果や、謎に包まれていた事が明らかになる文脈で使われ、主に「事実」に関して言及するときに使われる。

④の「世情に通じて頑固なことを言わない」は、「あの人は話の分かる人だ」などと聞き分けが良かったり、理解がある人を指す言葉である。

このように「分かる」には、何かまとまりのある物事を分けることにより、“理解につながるように意味を生じさせる”という意味があるようである。これは、まとまりのあるものを分けるという点で、「切断する」機能であり、切断することで、物事が分節化され、意味体系が構築されることになる。これがいわゆる理解につながるものと思われる。また、暗闇に光を当てることで事実を判明させて理解に結びつける点も、人類に灯である火をもたらしたプロメテウスの火を連想させる。この意味で、知的な側面も含まれる言葉であろう。

話すことに関していえば、②の何かを「理解する」という文脈で用いられることが多く、我々が日常生活で、誰かと意思疎通をとったりする際に必要不可欠な言葉、行為である。

ちなみに日本語の「理解する」の「解」という漢字を見ると、「解」には「角」と「刀」と「牛」が含まれており、人が牛の角を手で持って、刀で牛を切り分けるようにも読める。つまり、牛を各部位に切って分け、各要素に分解することになるが、解の字も「切る」と密接な関係があるのかもしれない。

では、次に臨床の観点から「分かる」について考えてみたい。

## 2. 土居の「分かる」

「分かる」という動詞について臨床の観点から考察したものに土居（1977）の論がある。土居は、日本語の「分かる」が「分ける」に由来し、英語とドイツ語と比べた場合、かなり日本語に特有な語であると述べている。

確かに、ドイツ語で「分かる」に相当する動詞は“*verstehen*”であり、英語では“*understand*”となるが、両方に共通するのは、ドイツ語では“*stehen*”、英語では“*stand*”と「立つ」という言葉が含まれている点である。英語の“*understand*”は、“*under*”と“*stand*”から成り、「下から立つ」という意味があるが、相手を「分かる」ということは、「相手のことや相手の状況を、その人の深いところに立って聴く」という意味になる。これは、相手の立場や文脈に配慮した行為であり、日本語の「分ける」、「切る」ということから成る「分かる」とは、かなり異なる働きがある。

もちろん、カウンセラーが、クライアントの話を聴き、不明な点があると、話を止め、質問をし、話を分割することで、話や聴き手の中に何かしら意味が生成することがある。しかし、あまりに「分かること」に力点が置かれ過ぎると、話し手の体験や文脈が十分に考慮されない危険性が伴い、話し手の傷つき体験にもなりうる。その意味で、「分かること」に関しては注意が必要といえる。

ちなみに日本語でドイツ語・英語のように「立

つ」に関連し、相手を分かる言葉に近いものを探すと、「相手の立場に立つ」という言い方がある。これは話の聴き手が、相手の文脈や気持ちを汲み、自分をその人の立場に置いて考えてものと考えて、言うことである。これは、相手の身になって考えるということでもあるが、「相手の身になってその立場から世界を見る」というような意味もありそうである。また、相手の話を「咀嚼する」という言葉も、自分に取り入れる際に、細かく砕くということでもあるが、やはり自分に取り込むには少しずつ形を砕いて自分の身体に取り込み、最終的には自分の身体の一部にするという意味があるのかもしれないこのように、人の話を聴く際は、知的なだけでなく、身体性も関わることを示唆しているようにも思われる。

### 3. 「分からないこと」の大切さ

また、土居は、話の聴き手が話を聴いた際に、全てを分かるのではなく、「分からないこと」に気づくことの重要性を指摘している。そして、それらを疑問として自分の中に保持しつつ、相手に質問を重ね、探索をしていく中で、相手の言うことの中に少しずつ「分かる」部分が増え、最終的により深い「分かる」や「共感」に至るとしている（土居, 1977）。

このことを心理面接から考えてみたい。実際に心理の面接において相手の話を聴いていると、話分からないことが実に多い。例えば、話の中で、「誰が」「誰に」対して話をしたのかなど、主語や対象が曖昧なまま話が進む場合がある。このとき、聴き手は、話の筋が「分からない」まま、混乱した状態の中で話を聴き続け、フラストレーションがたまることになる。そしてときとして、聴き手が、思わず主語を決め、それにより話を整理してしまいたくなる衝動に駆られることがある。これは、言い換えると、聴き手が、「分からない」体験に耐えられず、自分が「分かる」体験を増やし、話の筋を無理矢理に作った状態といえ

る。

しかし、クライアントの中には、育った環境の中で「自分」をあまり出せずに生きて来た者もいる。例えば、常に母親のことを気にかけて生きなければならず、渾然一体とした関係性の中で育った場合、母親と自分が混ざり、主語や対象が混ざった形で語られることが多い。このとき、もし、話し手の背景や、母子関係を考慮せずに早急な言語化を促したり、主語や対象を明確化させようとする、早い段階で話し手と母親の関係を「分ける」ことになってしまう。そして、話し手は分離に伴う激しい痛み感じ、道半ばで面接が中断に至る危険性もある。このように主語と対象に関する「分からなさ」一つを取ってみても、話し手にとって重要な過去や現在の関係性や、その人が育った歴史など、多くのことが含まれているといえる。ここで、主語や対象を聴き手が決めずに土居のいう「分からないこと」に重点を置く姿勢は重要であろう。聴き手が一方的にクライアントの主語や対象を決めるのではなく、時間を掛けて、話し手の中から主語や対象が区別され、話の筋が自ら生まれる過程を大切にすることが重要となる時が多い。

また、これ以外にも、面接の場で自分のことについて話そうとしても、自分がそれまで一人で困難を抱えてきたという強い自負心があるため、人に自分の弱みや困りごとを話せないときがある。そのため、話の内容に矛盾が生じたり、話が分かりづらくなったりすることがある。このとき、聴き手が自分の「分かる」範囲を広げようと相手の話の矛盾点を指摘して、整理しようとする、話し手は、弱い自分を直視しなければならず、自尊心が傷つけられてしまう危険性がある。そのため、話し手が安心感を感じ、自分の感情について素直に話せるようになるまで、聴き手が話の「分からなさ」や矛盾を保持しつつ、待つことは重要であるように思われる。

矛盾が、話し手の頑張りが凝縮されたものであ

ることを考えると、クライアントからの贈り物ともいえる。いずれにせよ相手はこちらを信頼してくれる状態に至るまでには、かなりの時間を要することになる。しかし、考えてみると、話し手が抱える問題や主訴は、様々な要因が長い時間を掛けて複雑に絡み合っていて形成されており、それ相應の時間と労力が必要なのも当然なのかもしれない。この点、「分からないこと」を大切にす姿勢は、我々に「待つこと」の重要性も教えてくれているともいえる。

また、誤解のないように付言しておく、ここで話し手の話を聴き手が細分化し、整理し、相手に伝え返すことを否定するものではない。このような行為は、思考や感情が混乱しているクライアントにとり、状況を一度、客観的に見て落ち着く上で意味があり、必要なことであろう。

以上、土居の「分からなさ」を臨床の観点から考えてきた。総じて言えることは、聴き手が「分かる」ことに重点を置き過ぎると、面接が聴き手主導となり、相手の主体や生きている文脈からかけ離れた理解に陥る危険性があるということである。また、分からなさを抱えることは、クライアントが変容することができる潜在的空間が含まれるということであろう。

### Ⅲ. 「分かる」に近い概念 —ドイツ語・英語の場合—

これまで「分かること」・「分からないこと」について述べてきたが、ここでドイツ語と英語から「分かること」に近い言葉を取り上げて考えてみたい。ドイツ語と英語において類似した言葉に以下のものが挙げられる。これ以外にも多くの言葉があるだろうが、本論ではひとまず以下のものに

限定して進めたい。なお、①の「分かる」は前章にて既に述べたので割愛する。

#### 1. ② 知る

日本語の「② 知る」の広辞苑（1998）の定義は、以下ようになる。

「領（し）ると同源」ある現象・状態を広く隅々まで自分のものとする意。

- a) 物事の内容を理解する。わきまえる。悟る。
- b) 見分ける。識別する。
- c) ある事柄の存在を認める。認識する。
- d) ある事柄のおこることをさとる。推知する。  
予見する。
- e) 経験する。
- f) かかわりを持つ。関知する

ここに示された a) から e) は日常によく使われる用法である。ここで注目したいのが、「知る」が領土の「領」の字に由来する点である。領土は、一般に自分が所有・支配する領域を指すが、これが転じて「現象・状態を広く隅々まで自分のものとする」ことにつながっている。つまり、単に知的に理解しているだけではなく、広く、そしてその細部に至るまで自分のものにする意味が含まれる

また、知っているようであまり意識されていないのが、f) の「かかわりを持つ。関知する」ではないだろうか。日常では、自分があまり仲が良くない誰かに何か不運が生じたときに「自分の知ったことではない」と言うが、これは「自分には関係がない」という意味で使われることが多い。しかし、「知る」ことに、自分と相手との

表 1

日 本 語	① 分かる	② 知る	③ 経験する	④ 体験する
ド イ ツ 語	① verstehen	② wissen	③ erfahren	④ erleben
英 語	① understand	② know	③・④ experience	

「関わり」が含まれていることは、重要な点であると思われる。(この点については、最後の節において述べる)。

## ② wissen (ドイツ語)

次にドイツ語の“② wissen” (知る) であるが、これは、日本語と同様、日常的に何かの事実を知っているときに使われることが多い。また科学・学問の領域における「知」とも深く関わる。例えば、ドイツ語で「科学」は *Wissenschaft* であるが、そこには “wissen” が含まれている。また、自然科学は、*Naturwissenschaft*、社会科学は *Sozialwissenschaft* であるが、ある領域に科学を (*Wissenschaft*) を組み合わせることで、大学における学問領域が構成されることになる。

また、これ以外に、wissen が含まれる重要な語に “*Bewusstsein*” (意識) という言葉がある。日本語の「意識」にあたるが、*Bewusstsein* は、*bewusst* と *sein* から成る。*Bewusst* は *wissen* の派生語であるが、直訳すると、「知っている存在であること」、「知っている状態にあること」という意味になる。ドイツ語の *sein* は、名詞の「存在」と「存在する」という動詞の両方の意味があるが、「知っていること」が存在や「存在すること」と結びつくことは興味深い。

ドイツ語圏では、「意識」という概念は、その人の認識の深さや、主体の在り方に深く関わり、筆者の経験上、日常的にある特定の層の人々によく使われる。例えば、ある人が自分をよく知り、世界における自分の立ち位置や、自分が成すべきことをよく知っている場合に、“*Er/ sie ist sehr selbstbewusst*” (彼・彼女はとても自己意識がある) という言い方がなされる。なされる、というのは他者からの評価であるためであるが、これは、人を評価する褒め言葉の中で最も高いものの一つである。ドイツではいかに自分に対する意識を持ち、周囲の中での自分の役割を意識・理解しているかが重要な価値基準であるといえる。これ

は、日本では「意識が高い」というと、嘲笑的な意味を込めて用いられることとは対照的である。

## ② know (英語)

次に英語の② know であるが、これは日常的に使われている語である。“*I know him/her*” であれば、「彼・彼女の知っている」という風に何かを認知していることを意味するし、自分が言ったことが相手に伝わっているかどうかを確かめる際は “*Do you know what I mean?*” などと聴くことが多く、直訳すると「私の意味するところが分かりますか?」となる。

また、*knowledge* (知識) は *know* から派生しているように、知識や認識を意味する。*Know* の語源は、ラテン語の *gnoscere* (知る・認識する) であるが、多くの派生語がある。例えば、*recognition* の「認識」、*ignorant* の「無知」、*ignore* 「無視」もそれぞれ *gnoscere* が含まれている。興味深いのは、*ignore* (無視) が、*i* (否定) + *gnore* (知る) から成る点であり、知を否定することが、「無視」につながっていることである。これは、日本語でも理解が足りず、浅はかな発言をしたときは、見識が浅いことを言うときに通じるところがある。

また、臨床でも多く用いられる「診断」という言葉は、英語では、“*diagnosis*” であるが、これも *gnoscere* に由来する。ラテン語では、*diagnosis* は、「*dia* (完全に) + *gnosis* (知る)」ことが元々の言葉の意味である。患者のことを完全に知ることができるかどうかはともかく、*diagnosis* が固定的なものではなく、相手を知ろうという人間の何かしらの動的な側面が含まれていることは一考に値しよう。

さて、これまで、日本語・ドイツ語・英語で「知る」を見てきたが、ドイツ語・英語では、日常でもアカデミックな領域でも用いられている語といえる。しかし、その一方で、日本語の「知る」には、相手と「関わりを持つ」ことが含まれ、こ

れは他の言語には見受けられない点である。

## 2. ③ 経験する

次に「経験する」であるが、日本では、「経験する」という言葉は仕事や実務経験を示す語として比較的よく使われるのではないだろうか。例えば、「あの人は～の業務経験がある」と言ったり、採用で、求人情報を読んでも「経験者求む」などと使われる。また、あの人は「サッカー経験者だ」などと、一定の過程を経て、その事柄に関して経験のある人について言及するときに使われる。また、経験は、その人にとり意味のある体験や人生経験になったことを言うときにも使われる。例えば、過去を振り返って「あれは良い経験になった」などと、自分がそれまで知らなかったことを身をもって体験し、何かしらの見識に至ったことを意味する。

この意味でドイツ語の③ *erfahren* も日本語の「経験する」に近い言葉であり、似た文脈で使われる。ただし、英語では、直接、経験する、*erfahren* に該当する言葉は、筆者が調べた中では見当たらず、*experience* がそれに相当すると考えられる。

## 3. ④ 体験する

次に「体験する」であるが、日本語を見ると広辞苑には「自分が身を持って経験すること。また、その経験」とある。日常的には「あまりできない体験」、「わくわくハラハラの体験」などというように、人の感情や感覚を含めた身体と結びついた経験を意味することが多い。また、「戦争体験」というように何か大きな出来事を経験し、その後の人生や人格形成に長期に渡り影響を及ぼす際に使われるときがある。このように見ると、身体を含めた体験から、長期に渡り、人生に及ぼす影響を指す場合など、様々な文脈で使われているといえる。

## ④ *erleben* (ドイツ語)

また、日本語と英語にはない、ドイツ語独自の動詞に“*erleben*”がある。これは直訳すると「生きること」、「生きられること」という意味になるが、ドイツでは、*erleben* (生きる) は、学問的領域と関わりのある *wissen* (知る) や、*erfahren* (経験する) とは明確に使い分けられ、その人の体験や人生経験をあらわす非常に重要な概念である。

では、どのような時に使われるかという、例えば、ある人がある出来事に遭遇し、身を持ってそれを体験し、その体験が後の自分の人生に深い影響を及ぼすときに“*Ich habe etwas erlebt*”と「私は何かを生きた」というような言い方をする。

*erleben* (生きる) という動詞はドイツ語では4格の目的格を取り、目的語とセットになるため、「～を生きる」、「～を生きた」という言い方になる。日本語の何かを身をもって体験した際、「あれは良い経験になった」と言い方が、ややそれに近いかもしれないが、ドイツ語では、*erleben* と直接「生きる」という言葉が入っているため、独特の重みと語感がある。

では、この *erleben* は何を含む概念なのであるか。

例えば、「私は日本を知った」というのと、「私は日本を生きた」というのでは、意味することが明らかに異なる。前者は、ある事実を知った、認知したという意味である。しかし、「私が日本を生きた」という場合、話者である私が目的語と一体になり、主語と目的語が分けられない状態になる。そのため、「それ自体に私になる」となり、私と対象は、不可分な状態になる。つまり、話し手が日本という国や文化を自分自身に取り込み、それ自体となり、それを生きたという動的なプロセスとなる。これは言い換えると、体験するためには、話し手の主体や体験、感情などが総動員され、自分の存在を賭けてそれ自体を生きる過程とはいえないか。

このことを踏まえると「生きること」(erleben)という語は、何かを対象化することにより構築される知の体系やいわゆる学問体系とは異なる。むしろ、それは、人がその対象自体を自分を含めて直接、「生きる」ことにより構築される新たな知の領域といえる。

#### ④ experience (英語)

次に英語では“experience”があるが、ジーニアス英和辞典(2014)を見ると、元々は「試みて得た知識」という意味である。また、「1. 経験、体験、経験内容(経験で得た知識・能力・技術) skill 2. (具体的に) 経験したこと、体験したこと、体験談、経験して得た知識」という意味もある。

ここで少し臨床の観点から experience について考えると、Winnicott は、移行対象について述べる中で、「体験することの中間領域」“intermediate area of experience” (Winnicott, 1953, 北山, 2005) という領域について言及している。このことについて説明をすると、赤ん坊は、まず安心できる母親などの重要な他者との関係を基盤として、心身の土台を育むことになる。そして、これらの関係を軸としつつ、おもちゃなどの対象を発見し、そこから遊びを創造することによりさらに心身が育つということになる。このとき、赤ん坊と母親などの重要な他者の両者により生み出される空間が中間領域であり、これは二人のこころの空間が交わることで成立する領域であるともいえる。

Winnicott はこの中間領域において赤ん坊(そして母親などの他者も) 様々なことを体験すると述べているが、確かに赤ん坊は、遊びや様々なことを「試みる」中で自分のこころが生き、赤ん坊の存在が育まれることが多い。英語の experience が元々「試みる」という意味があり、動詞では「感情を体験する」と意味することを考えると、Winnicott が中間領域を「感情を体験する場」と

しても考えていたといえる。

さて、ここで子どもが一人だけで何かを体験するのではなく、赤ん坊と重要な他者との「二者の関係」が必要になるという点は注目に値する。つまり、人が何かを体験するときは、一人で体験することが難しく、人と人が出会い、両者の時間と心的・現実的な空間が共有されたときに初めて可能となるのである。Winnicott は赤ん坊の存在が一つの固定的な存在ではなく、連続体として現在進行形で存在する“going on being”としたが、そのとき母親を含めた抱える環境(holding environment)の存在が不可欠であるとしたのもこのことと関係すると思われる。(例えば、Winnicott, 1960、藤山, 2010)

このように見ると、二人の人がその場に居合わせ、その二人が「今、ここにある」時間と空間を共有し、そこで様々なことを体験する「体験の知」が存在する。これは、生きる人が中心となる臨床では重要な体験知なのではないかと思われる。心理療法では、セラピストが目の前の生きた人間と関わり、その人の苦しみと向き合うことから始まるが、このとき、セラピストとクライアントの間で生まれる心の動きが重要となる。つまり、両者の間に生まれる体験と動きが、臨床的な知と関係する一つの領域として見ることができよう。

このような二者が現在進行形で関わり合って生まれる類似した体験知は、ドイツ語圏でも見られる。前述した erleben (生きる) から派生した動詞に“miterleben”というものがある。これは、mit (with) + erleben (live) から成る語であり、直訳をすると「そのときにそれを共に生きる」という意味になり、erleben よりも「同時に」と「共に」という意味合いがより強まる。ドイツ語圏では、“Das konnte ich gluecklicherweise miterleben” などと言われることがあるが、これは「幸運なことに同じ時/時代にそれを一緒に体験することができた」という意味になる。このこ

とは、同時進行的にある人や事象と体験を共有して、何かを理解する過程を示しているように思われる。

さて、これまで「分かる」に近い概念を日本語と英語・ドイツ語から見てきた。日本語の「知る」には、「関わる」「細かい所まで自分のものとする」という意味があり、知るという行為には事実を認識するという意味以外に、何かを深く自分のもの（身体の一部）にする意味が含まれる。また、人の「関与」や「関わり」も言葉の中に含まれるが、何かを「分かる」には、自分の主体や存在を含めた理解の領域が存在するといえる。

また、ドイツ語の *erleben* のように、人が何かを分かるには、人間が生きその対象を深く生きて、体験することが重要となる関係。また、英語の “*experience*” では、人と人の間に生起する体験世界や、同じ時間・空間を体験することにより生じる体験領域が存在する。

これらは、人間が長い歴史の中で何かしらの必然性により生み出した言葉であるが、これは、人間が単に知的な「知」のみで生きていくことができないことを暗に示している。我々は現在においても、もう一つの領域、つまり人と人（もしくは、何かの現象）が互いに関わり、「生きることに関する知」の領域を構築し続ける必要がある。

では次に実際の人の語りから、人の体験や話を聴くことについて考えてみたい。

#### IV. 人の体験の語りを知ることについて

##### 1. 体験の「違い」

ここで難民支援に携わった山本の著書「カプルー・ノート、戦争しか知らない子どもたち」（山本, 2001）を取り上げたい。山本は、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に勤務し、国連職員として1997年からアフガニスタンやパキスタンなどで難民支援にあたり、現場で多くの難民と接してきた人物である。次の文は、本書の中のアフガニスタンのある女性の話である。

「顔を隠した十二人の男たちが家に来ました。みんなカラシニコフを持っていました。彼らは私たちの娘を出せと言いました。私たちは拒みませんでした。でも、彼らは娘と直接話をさせろと言ってきませんでした。それで私たちは娘を隠していたところから連れてきました。娘はあなたたちについていくのは嫌だと言いました。そうすると十二人の男のうちの一人がカラシニコフを娘に突きつけ、撃ちました。娘は死にました。彼女はほんの12歳でした。もうすぐ上の学校へあがるところでした。私たちはその日、娘を埋葬しました」。

（ガズニ県から逃げてきたあるアフガン女性の話）

カラシニコフは、日本ではあまり馴染みのない言葉かもしれないが、AK-47と呼ばれるロシア製の自動小銃である。軽量で操作がしやすく、1分間に30発撃つことができる殺傷能力の高い銃として知られ、世界の紛争地帯で数多く出回っている。

このアフガン女性は、この銃を持った男達に無理矢理、娘の命を奪われたが、女性は、その出来事の状態を淡々と説明し、自分の気持ちについてはほとんど触れていない。わずかに、「娘はほんの12歳でした」という所に、これからの人生があったにも関わらず、幼い娘の命が奪われたことへの無念さが述べられているように感じられる。

この女性は、娘を失った時も、そしてその後も、理不尽に若い娘の命を奪われたことへの悲しみや怒り、兵士による暴力の恐怖を何度も感じたことであろう。また、自分が兵士から隠していた娘を脅されたために出してしまったことへの後悔や、娘が命を奪われる場に居合わせたにも関わらず、何もできなかった自分に対する情けなさや無力感も感じたであろう。このように「カラシニコフ」という言葉一つを取ってみても、その裏には女性の様々な言葉にならない想いが込められており、この銃は女性のこころと人生に取り返し

かない深い傷を残している。

では、日本に住む者にとり「カラシニコフ」は何を意味するであろうか。多くの者にとり、それは聞いたことがないものであり、身内の死や暴力とは結びつかず、何の関わりがないまま終るものであろう。このように、日本人とアフガニスタン人の両者の間には「体験の差」が存在し、その差は埋めがたいものがある。山本は次のように述べている。

「僕と彼らの間に共通言語はありうるのだろうか？ コミュニケートが成立する可能性があるのだろうか？ 彼らの算数の教科書を見てみよう。『カラシニコフが2本とカラシニコフ3本を足すと、カラシニコフは何本になりますか？』、『あなたはロシア人を3人殺しました。私はロシア人を4人殺しました。さて、全部で何人のロシア人を殺したでしょう？』 彼らはこうやって足し算を覚えてきたのだ。僕の教科書は「2本のバナナ+3本のバナナ=5本のバナナ」だったであろう。カラシニコフとバナナの差はとてつもなく大きい。いや、ロシア人の死体とバナナの差は人間の生きる次元を変えてしまうのではないか」（同掲書）。

日本ではバナナ、アフガニスタンでは、銃と殺したロシア人の死体の数が使われている。「同じ」数字を扱い、同じ算数の練習をしているにも関わらず、両者では数の裏にある前提、山本がいうところの「生きる次元」が異なっている。山本は、このような自分とアフガン人の間に存在するギャップを受け、自分と彼らの間に果たして共通する言語があるのか、両者の間にコミュニケーションが成立するのかという問いを投げかけているが、これは先の女性の体験と日本人の体験の差を踏まえると非常に遠い道のりであると言わざるを得ない。

では、このように体験が大きく異なる場合、いかにしてコミュニケーションが可能なであろう

か。筆者はそれにあたり日本語の「知る」、「知らない」が重要な手がかりになると考えている。次にそのことについて述べたい。

## 2. 「知る」、「知らない」ことがもたらすこと

次の文章は、10歳のアフガニスタンの少年が書いたものである。

「僕は、戦車、カラシニコフ、地雷を知っています。でも、「平和」というのがどんなものか知りません。見たことがないからです。でも、他の人から聞いたことがあります。

僕はたくさんの武器を知っています。ほとんどの武器は、バザールや、街や、学校の壁や、家の前や、バスの中や、その他どこでも見られるからです。「平和」というのは鳥のようなものだと言ってくれた人がいます。また、「平和」というのは運だと教えてくれた人もいました。でも、それがどうやってやってくるのかは知りません。でも「平和」が来ると、地雷の代わりに花が植えられると思います。学校も休みにならず、家も潰されなく、僕も死んだ人のことを泣くことがなくなると思います。「平和」が来たら、家に帰るのも自分の家に住むのも簡単になると思います。銃を持った人が「ここで何をしている？」とか訊かなくなると思います。「平和」が来たら、それがどんなものか見ることができると思います。「平和」が来たら、きっと僕が今知っている武器の名前を全部忘れてしまうと思います。- 中略 - この少年は、自分が何を知らないかを認識している。僕は自分が何を知らないかを認識できているだろうか」（下線部、筆者）（同掲書）。

この文章では、少年により「知る」・「知らない」という言葉が何度も用いられている。この少年が「知っている」ことは、多くの武器や、戦争による破壊、恐怖、死、悲しみの感情である。「知る」という言葉が、自分の「領分」（広辞苑、

1998)を意味することは既に述べたが、何かを「知っている」ということは、知っているものが自分の存在・身体と不可分なことである。この少年の場合、戦争による被害や恐怖を日常のあらゆる場面で、嫌という程味わい、その中で生きてきたからこそ、戦争を「知っている」と述べられるのであろう。それは安易な対象化による知的な理解ではなく、対象そのものが自分の人生に食い込んでいる状態といえる。この意味で、少年の存在は戦争の体験を強く受けて形成されたといっても過言ではない。

では、逆に「知らない」ということはどのようなことであろうか。この少年は、実際に平和の中で生活をした体験がなく、平和は全くの未知の領域である。皆藤(2004)は、風景構成法において沖縄出身者のみが田を「知らない」と描けず、その際、生活の糧になるものを描くようにと伝えた所、「さとうきび畑」が描かれたことを挙げている。そして、「『知る』ためにはそこに、主体の生きる体験がなければならない」(下線部筆者)と述べている。この少年が平和を「知らない」という場合、自分の存在(主体)が平和の中で生きるという体験をしたことがなく、平和を身体化できなかったことを意味する。

では、果たしてこの少年は、平和を「理解していない」のであろうか。少年は平和を知らず、周囲の人に平和について色々と聴き、本人なりに平和について想像することでなんとかそれに触れようとしている。しかし、少年が「もし、平和が来たら」と想像し、平和について描写する世界は非常に的確であり、これは我々が日本で毎日、享受している状態である。筆者には、この少年が、大多数の日本人よりも深く、平和の状態を正確に理解しているように思える。これは、少年が戦争を体験的に「知っている」からこそ、戦争がない平和な状態を正確に想像できるのであろう。

では、逆に日本人は平和を「知っている」のであろうか。日本では、平和があまりにも当たり前

になり、意識せずにその中で漫然と生きている人が多い。山本が自身の認識を問うたように、平和の中で生きている日本人が、必ずしも平和を自分の主体を含めて「知っている」とは限らないのである。むしろ、自分が何を「知らないか」を「知らない」のである。

一般的に「知っている」ことが重視され、「知らない」状態が軽視される傾向にあるが、重要なのは、話し手であるその人が生きている次元・地平に聴き手が立とうとすることなのではないだろうか。この少年が平和を「知らない」というとき、そこには戦争の中でその人が生きてきた無数の体験や想いが込められている。聴き手が、少年が「知らないこと」を「知る」ことは、話し手の存在を構成する根源的な「何か」に触れることになり、それまでの自分の在り方が大きく揺さぶられる体験をしつつ何かを知るということにつながる。この意味で、我々は何かを「知らない」という人々に対し、もっと敬意を払い、その人々が生きる体験世界を学ぶ必要があるように思われる。

また、皆藤(2010)は、「『体験』にコミットするとは、個にもたらされる「体験」を手がかりとすることから事象に新たな意味が見出されてくるプロセスのこと」であると述べている。このことから、少年の「知らないという体験」に我々が関わり、互いに新たな意味が浮かび上がることが、新たな地平を開くものと思われる。

### 3. 人の語り・体験を聴くこと

これまで「知らないこと」を知ることがもたらすことについて述べてきたが、アフガニスタンと日本に生きる者とは、体験の差はあまりにも大きく、生きている世界が全く異なる。このような中、本当に相手の体験を知り、コミュニケーションをすることなど可能なのかという問いが浮かぶ。

この点、日本語の「知る」ことには、「関わる」という意味が含まれている点を改めて考える必要

があろう。つまり、例え、お互いの体験や生きている次元があまりに違い、分かち合うことが不可能に思える場合でも、相手や、相手を形作る大きな存在となんとか「関わろう」とする中で、お互いを知り、コミュニケーションを取れる可能性がわずかながらに生まれるのかもしれない。つまり、関わりがないところに、知ることは成り立たないといえる。人のことを知ろうと思えば、そこに生きる人の主体や、その人が生きる世界に聴き手が触れなければならない。そして、相手に触れる際、聴き手の主体がそこに関与していなければ、それは成立しない。

また、先の少年のように平和を「知らない」というとき、戦争を知らない聴き手と少年が「違う」事実が厳然と突きつけられることになる。そのため、あまり容易に関わりやコミュニケーションが成立するとは思わずに慎重になった方が良いでしょうにさえ思えてくる。

しかし、アフガニスタンの人々の語りが我々に教えてくれることは、同じ言葉を使っているからといって安易に「分かったつもり」になることがいかに危険であり、コミュニケーションが簡単には成立しないという認識なのではないだろうか。日常生活、そして臨床の場においても誰かとコミュニケーションしようとするならば、その人の体験を聴き、自分との間に違いや断絶があろうとも、知ろうとすることから始まるように思われる。そして、人の体験を聴くということは、相手のことを「知りたい」と思い、相手に身をもって関わろうとする姿勢にこそあらわれるといえる。

最後に、ドイツ語では、知ることを「生きること」(erleben)といい、日本語では知ることは、領域の「領」と、「関わる」ことを意味する。我々が誰かの語りを聴き、その人の体験を知ろう

とするとき、それは、自分が相手の身になって生き、そしてお互いが関わることで初めて可能になるのかもしれない。そして、そのときにお互いの間に相互の主体を含めた「関係性」が芽生える可能性があると思われる。

本論において触れたことは、これまで人間が営んできた過程のほんの一端に過ぎないが、今後、様々な人々の語りや体験を聴き、人間を知る営みを一層、育んでいく必要がある。

## 文 献

Afghan Women's Network in Islamabad and Peshawar  
In Search of Peace: Afghan Women's Diverse Voices  
Against Violence.

土居健郎 1977 方法としての面接 臨床家のために  
医学書院

Duden Online Wörterbuch <https://www.duden.de/rechtschreibung> (2021.4.3 取得)

藤山直樹 2010 集中講義・精神分析 下 フロイト  
以後 岩崎学術出版社

山本芳幸 2001 カブール・ノート 戦争しか知らない子どもたち 幻冬舎

皆藤章 2004 風景構成法のとくと語り 誠信書房

皆藤章 2010 体験の語りを巡って 誠心書店

北山修 2005 小児医学から精神分析へ ウィニコット  
臨床論文集 岩崎学術出版

Lea, D. Bradbery, J. 2020 Oxford University Press  
Oxford Advanced Learner's Dictionary, Oxford  
University Press.

Sullivan, H.S. 1966 Conceptions of Modern Psychiatry.  
W. W. Norton and Company, Inc.

南出康世 2014 ジーニアス英和辞典 第5版

松本仁一 2019 国家を食べる 新潮新書

新村出(編)1998 広辞苑 第五版 岩波書店

Winnicott, D.W. 1953 Transitional Objects and  
Transitional Phenomena; A Study of the First Not-Me  
Possession. *The International Journal of Psychoanalysis*.  
34, 89-97.

Winnicott, D.W. 1960 The Theory of Parent-  
Infant Relationship. *The International Journal of  
Psychoanalysis*. 41, 585-595.

## **ABSTRACT**

Some Clinical Considerations in Listening to the Intangible Narratives

NISHIURA, Taro

*Konan University*

Clinical interviews are crucial part of psychotherapy. Doi (1977) indicates that if the therapist listens to the narratives of the client and discovers points that are “difficult to understand” (wakaranai), he/she should appreciate it and think carefully about the client’s condition and his/her backgrounds. This awareness of the therapist could create a potential space for the client which leads to a deeper understanding of his/her condition, state of mind and the hidden context which he/she might not be aware of.

In this paper, concepts and verbs such as German verb “erleben”, English verb “experience” and Japanese verb “shiru”(knowing) were examined. It has been proved that these verbs are useful conceptions that facilitate the mutual communication with the clients who have difficulties in verbalizing their emotions and thoughts.

*Key Words* : narratives, communicating, shiru (knowing)

---